

柘榴と林檎とが、何方が一番美しいといつて争つて居た。互に言ひ張つて、口論最中になつた時、隣りの生垣から、荊蕀の花が、ひよいと顔を出して、さも自慢げな聲で言ふには『まー、貴嬢がた、少くとも妾の居る所では、そんな無益な口論はお已めなさいませな』

アンドロクルスと獅子

牧

羊

近頃動物虐待防止會といふ會の出來て居ることは皆さん既に御存じでせう。この會は、人間が、自分よりも下な弱い動物を苛めるのは、いけないなるべく大事にしてやらなければならぬといふのでつまり動物を可愛がつてやることを、世間一般の人に奨励するのであります。

動物だつて、つらい事も悲しい事も知つて居れば嬉しい事も楽しい事も知つて居ます。夫を無暗に苛めるのは、まことに彼等に取つて可愛相な仕業でありませんか、殊更、動物の中でも、恩に感じて其恩に報ゆることなどもよく知つて居るのが澤山あります。犬とか、馬とか、猫とか、牛とかの恩に感じたお話は、古からの本に澤山出て居ませう。して見ると動物だつて決して無闇に苛めてはなりません。

彼の獅子といふ獸は、皆さん御承知の通り、勇猛無類で、獸の王とまでいられるのであります。其獅子に就いて、古くから傳はつてゐる面白いお話があります。

むかし、アフリカの北の岸の所に、カルセージといふ國がありました。其國に、アンドロクル

スといふ一人の奴隷が居りました。毎日々々、主人にこき使はれて、ひどい目に許り遭ひますので、もゝとて、辛抱しきれなくなつて、或日のことゝ主人の家を逃げ出しました。

さて、だん／＼、其市街を逃げて、走り出しました。或山道にかゝつた時は、日も暮れるし、腹も空くし、足も痛くなるし、もゝ一足も歩かせんから、其處いらの大きな洞穴の中へ這入つて、横になつた儘、ぐつすり寝こんで仕舞ひました。

暫く経つと、入口の方で、何か知らん、大變な咆聲がするので、吃驚して目を醒まして、走り出て見た所が、穴の入口の所に、大きな大きな一匹の獅子が、ツツ立ッて居りました。

こゝなつて見ると、もゝ逃げるにも逃げられない、一口に噛み殺されるより外はないと思つて居

た所が、不思議にも、其獅子は、音なくアンドンロクルスの方へ近づいて来る、別に恐ろしい顔附もしないで。そして、何だか哀れつぽい、低い聲を出して、しきりに何か助けて欲しい様な風をする。だん／＼側に近づいて来た所で、よく／＼見ると、一本の足を跛ひいて居る、どうも怪我でもしたのでありませうか、少し腫れて居る様な風だ。『ハ、ハ、これだな』、と分つたので、早速獅子の側へ倚つて、丁度醫者が病人を診る様な具合に、其足を取つて見た所が、跛もひく道理、其足の裏には、大きな太い藓がたつて居ました。そこで、すぐ其藓を引き抜いて、ハンケチを引きさいて、傷をしつかりいはへてやつた所が、痛みがすぐ直つたらしい。所が、此時の獅子の喜といつたら、大變なもので、丁度遊び盛りの小犬の様に、

大きな尾を振つて、アントロクルスのぐるりを飛び回るやら、手を甜めるやら足を甜めるやら、出来る限りの厚意を顯はしました。さて其時から、アンドロクルスは、尤て獅子の大事なお客さんになりました。獅子は毎日出かけて行つては、獸などを取つて来て、夫をアントロクルスに分けて食べさせます。

こんな風に、アントロクルスは 彼れ是れ二月餘も獅子と一所に暮して居ましたが、或時、何の氣なしに、一人で山を散歩して居つた所を、とど一追手に捕まつて 又元の主人の所へ引張つて行かれました。

所が、此時分の法律では、一旦逃げ出した奴隷が捕まつた時は、獅子に喰ひ殺させるといふ刑罰なのです。其爲に大きな觀せ物場が出来て居つて、

大勢の人が集つて人間が獅子に喰ひ殺されるのを見物に行くのです。

そこで、アントロクルスも、だんぐ調べられた未矢張り、此刑罰を受けることになりました。も一どうしたつて仕方がないと諦めましたから、柔順く觀せ物場の真中に引張り出されて、從容として、定まつた運命を待つて居ります。大勢の市民は、周圍の棧敷に座つて、この悲惨な演劇を見物して居ます。

暫くすると、片一方の隅から、恐ろしい咆哮聲が聞こえた。見物人は一時に震へ上つた。見ると大きな獅子が猛り狂うて飛び出したのである。燃ゆる様な眼は火の様に輝いて、口は耳までも劈けて居る。いさなり真中の餌食に飛びかゝらうとした。見物人一同は、先づ膽を冷やした。然し其次の瞬

間に於ける見物人の驚きは、又大したものだつた。一思ひに飛びかゝつて食ひ殺すだらうと思つた其獅子が、打つて變つて音なしくなつて、丸で飼犬が主人に甘つたれる様な調子で、アンドロクルスに纏き付いて居る。

餘りの不思議に、これには何か所以があるだらうといふので、役人どもはよつて集つて、其譯を話させた。そこで、アンドロクルスは、何時か山の中で獅子を助けた話をして、其助けた獅子といふのは、はからずも茲に立つて居るこの獅子だつたといふことを演説しました。

大勢の見物人は此話を聞いて、非常に感動しました。そこで、アンドロクルスを放免してやることを役人に願ひました所が、役人も尤だと思つて、とうとう彼を宥して、おまけに、此忠實な獅子を

も與へたといふ事でありませす。

眞實の饗應

き み 子

ある人が、親類の家へ遊びかたぐ尋ねて行きました。親類の人といふのは、いつでも御客に愛相のよい人でありませすから、大變に喜んで、いろいろ御馳走をして饗應しました。そして、お別れの時になつてからも、一向御馳走も何もなかつて、御氣の毒であつたといふことを、くれぐれも言譯致しました。

すると、其人の申しますには、

「いえ、澤山御馳走になつて、御禮の申し様もございませせん。然し、この次あなた、私の家へ御いで下さつた時には、夫こそ今日あなたが、私を